

條支と大秦と西海

宮崎市定

内容一 緒論

- 二 條支國比定の四條件
- 三 安息西界とは何ぞや
- 四 條支はセリウキアなり
- 五 大秦の地理風習 地圖一、圖二
- 六 結語 附表二種

一 緒論

思ふに條支(又は條枝)と大秦とが東西の學者によつて論議せられたるや抑も久しい。かのヒルトの名著「支那と大秦」(Hirth: China and the Roman Orient 1885.) 以來、吾國では白鳥博士・藤田博士の好研究がある。(註一)私は元來、斯る方面には餘り興味を有しなかつたのであるが、近頃東西洋交通の推移に關して、些か考察を試みることあり、次第に古代に溯りたるるところ、從來殆ど解決し盡されたるものと信じてゐたる此の大問題もなほ論議すべき幾多の難點を有し、再びこの舊題を取上げて根本より検討し直すの必要を感じた。これ私には専門外の小論文ある所以である。

關係資料は史記・漢書・後漢書・三國志の範圍を出ないが、讀者の便宜を計り、必要の箇所を左に摘出する。

條支關係資料

(一) 史記大宛傳。條支。在安息西數千里。臨西海。暑濕耕田田稻。有大鳥。卵如甕。人衆甚多。往々有小君長。而安息役屬之。以爲外國。國善眩。

(二) 漢書西域傳。安息。國王治番兜城。(略)西與條支接。烏弋山離國。(略)西與犁靬條支接。行可百餘日。乃至條支。

(以下史記ニ同シ)

(三) 後漢書西域傳。烏弋山離國。(略)復西南馬行百餘日。至條支。條支國城在山上。周回四十餘里。臨西海。海水曲

環其南及東北。三面路絕。唯西北隅通陸道。土地暑溼。出師子犀牛。(略)轉北而東。復馬行六十餘日。至安息。

後役屬條支。爲置大將。監領諸小城焉。

安息。和帝永元九年。都護班超遣甘英。使大秦。抵條支。臨大海欲度。而安息西界船人謂英曰。海水廣大。往來

者逢善風。三月乃得度。(略)自安息西行三千四百里。至阿蠻國。從阿蠻西行三千六百里。至斯賓國。從斯賓南行

度河。又西南至于羅國。九百六十里。安息西界極矣。自此南乘海。乃通大秦。

(四) 三國志卷三十注引魏略。前世又謬以爲。(條支)彊於安息。今更役屬之。號爲安息西界。

大秦關係資料

(一) 後漢書西域傳。大秦國一名犁靬。以在海西。亦云海西國。地方數千里。有四百餘城。小國役屬者數十。(略)其王

常欲通使於漢。而安息欲以漢繒綵。與之交市。故遮闔不得自達。至桓帝延熹九年。大秦王安敦。遣使自日南徼外。獻象牙犀角瑇瑁。始乃一通焉。其所表貢。並無珍異。疑傳者過焉。(略)從安息陸道繞海北行。出海西至大秦。人庶連屬。(略)又言有飛橋數百里。可度海北諸國。

(二)魏略。大秦國一號犁靽。在安息條支西。大海之西。從安息界安欲城。乘船直截海西。遇風利二月到。風遲或一歲。無風或三歲。其國在海西。故俗謂之海西。(略)却從安谷城。陸道直北行。之海北。復直西行。之海西。(略)國有小城邑。合四百餘。東西南北數千里。其王治濱側河海。(略)其國無常主。國中有災異。輒更立賢人。以爲王。而生放其故王。王亦不敢怨。(略)常欲通使於中國。而安息圖其利。不能得過。(略)從安息繞海北。到其國。人民相屬。(略)前世但論有水道。不知有陸道。(略)澤散王屬大秦。其治在海中央。北至驢分。水行半歲。風疾時一月至。最與安息安谷城相近。西南詣大秦都。不知里數。驢分王屬大秦。其治去大秦都二千里。從驢分城。西之大秦。渡海飛橋二百三十里。(略)從思陶國。直南渡河。乃直西行。之且蘭國。(略)從且蘭復直西行。之氾復國。六百里。南道會氾復。乃西南之賢督國。且蘭氾復直南。乃有積石。積石南乃有大海。出珊瑚真珠。(略)賢督王屬大秦。其地東北去氾復六百里。氾復王屬大秦。其地東北去於羅三百四十里。渡海也。於羅屬大秦。其地在氾復東北。渡河(海ノ誤カ)。從於羅東北。又渡河斯羅。(略)斯羅國屬安息。與大秦接也。

二 條支國比定の四條件

先づ條支國の位置比定を試みんに、之を決定す可き條件の中、最も重要なものは左の四項である。

一、安息の西にあり。

史記。條支在安息西數千里。漢書。安息西與條支接。

二、安息より大秦に赴く交通路上にあり。

後漢書。甘英使大秦。抵條支。臨大海欲度。魏略。從安息界安欲城。乘船直截海西。遇風利二月到（大秦）。

三、西海に臨む。

史記。條支。臨西海。（漢書同シ）

四、安息に役屬す。

漢書。安息役屬之。以爲外國。

依て従來の學者はこの四項に該當する地點を求めたる揚句、ヒルト・白鳥博士はカルデア地方即ちチゲリス・ユウフラテス下流域を、藤田博士はその東方に隣接せるファルス地方を合格と定められたのである。

今改めてこの候補地につき探點し直さんに、第一項の安息の西にありといふ條件は暫く措く。第二項より見て、果してカルデア若くはファルスの地は、安息より大秦へ通する交通の要路であつたであらうか。大秦の位置は亦暫く措くが要するに地中海岸の一點と假定して差支へない。而して安息は支那より地中海岸に出づる交通の大幹線上に位置して貿易の利を占めてゐたのであるから、此處に一先づ當時支那より地中海に出づるには如何なる交通路が存在し

たかを一應考へておく必要がある。

第一は陸道であつて、中央亞細亞より安息に入り、其北部を通過し、ユーフラテス上流を渡り、シリアに出る。

第二は海道であつて、支那南方の海港より、印度支那・印度・亞刺比亞の三半島を廻つて埃及より地中海に出る。

第三はその中間であつて、即ち海路波斯灣頭に至り、それよりユウフラテス河を溯り、中流バビロン附近より陸路砂漠を横断してシリアのダマスクスに出るか、或は更に上流まで溯航し、ニデッサ附近よりシリアのアレッポ邊に出で以て地中海に達する。

勿論以上の三交通路は事情により多少修正さるゝを免れないが、併し陸路支那より運ばれたる貨物が、一旦波斯灣頭まで南下して、此處より海路を取つて亞刺比亞半島の大迂回をすることは考へられぬ。既に陸路安息へ出たものであれば、そのまゝ陸路安息領の北部を通過してシリアに出づ可く、何を苦んで數十日程を費して波斯灣頭に出で、更に困難なるアラビア周航の道程を擇ぼうか。白鳥博士がヒルトの説を其儘承けて、

當時支那や中央アジアの物資が Alexandria (博士の大秦) に達するには殆ど悉く波斯灣頭を経由することになつてゐた(條支參考)。

と云はれたのは領解に苦しむ次第である。安息より地中海への通路はシリアを経由するのが正道である。嘗て波斯王カムビセスの埃及を討つやこの道により、後にアレキサンデル大王が埃及より波斯に侵入するや、亦この道によつた。大軍は交通の幹線に沿つて進む。若し中央亞細亞より誤りて波斯灣頭に出でたる旅行者があつたとしても、恐らく彼

は危険なる紅海海上よりも、安全なる陸路か、若くはユウフラタスの水運を利用してシリアに出でて地中海海岸の目的地へ赴く経路を擇んだであらう。

次には第三項條支が西海に臨む點に就てある。既に條支をカルデア若くはファルスとすれば、勢ひ西海は波斯灣とならざるを得ない。併し波斯灣は安息よりして西海と呼ぶには著しく不適當である。安息は北に裏海に臨み南に波斯灣を控ふるが、シリアと最も密接な關係にあれば地中海を知らなかつた筈がない。此點印度が東西に海を有するとは全く地形を異にしてゐる。何處に、地中海を西海と云はずして、反つて南海とも云ふ可き波斯灣を西海と呼ぶ道理があらうか。故に吾人は先づこの西海を檢せん、

魏略。乗船直截海西。遇風利二月至（大秦）。

とある。この海は即ち西海に外ならぬが直ちに海を截つて云云と云へば西海は大秦に直面したる海でなければならぬ。大秦がアレキサンドリアにもせよ、然らざるにもせよ、それが地中海に臨んでゐることは疑を容れぬ。而して條支は大秦と同一海面に臨んでゐなければならぬ。云ひ換れば西海は大秦が臨む所の地中海であつて、條支は地中海沿岸に之を求めなければならぬのである。安息より見て地中海こそは正に西海とよぶに相應しい。

思ふに前人の研究も前述二項に就ては十分考察が拂つてあり、苦心の跡も偲ばれるのであつて、扱こそヒルトの如き、條支と大秦を同一海面におく爲に、條支を波斯灣頭に、大秦を代表する犁軒なるものを拉し來つて紅海の奥なるレケムに置かうとしたのであつた。而も私の云ふ二項の考察を進めて西海を地中海なりと斷定する迄に徹底する能は

ざりしものは、實に第四項の條支が安息に役屬するといふ條件に妨げられたる爲に外ならぬ。次には之に關聯して甘英が大秦に達せんとして能はず、條支より引返したる時の一挿話を餘りに重要視し、延て東西洋交通の大幹線を歪曲するの誤謬に陥りたるものである。

三 安息西界とは何ぞや

濱海の地條支を安息領土内に求むれば、之を裏海岸に置かざれば、波斯灣頭におくの外ない。併し果して條支は安息領土内にありしや否や、前人は無條件に之を認めてゐるが、こゝに陥罪あり、この事實こそ眞先に検討し直す可きものである。依て條支が安息に役屬すといふ第四項に就て根本資料を探せば、

(1) 漢書及史記。人衆甚多。往々有小君長。而安息役屬之。以爲外國。

(2) 後漢書。安息後役屬條支。爲置大將。監領諸小城焉。

(3) 魏略。前世又謬以爲。(條支)疆於安息。今更役屬之。號爲安息西界。

右の内後漢書の記載は史料としての價值最も劣る。蓋しその書最も晚出、前書を補綴して成りたるもの、この條に於ても史記漢書を換骨奪胎、筆を舞はして文を爲したるもの如く、果して文字通りに安息が大將を置きて條支の諸小城を監領せしめたるの事實なりしや否やも遽かに信をおき難い。之を除けば史記漢書の記載は寧ろ條支を安息領土外に置く意向の如く見受けられ、魏略は之を云ひかへて安息西界なる名目を提出したるに過ぎない。

史記漢書に云ふ外國とは所謂罽縻、外藩の意味で、支那の用例によれば、その朝鮮・安南等の朝貢國に對する關係を云ふ、日本すらも時にはその一に數へられ、宋史外國傳の中に日本の名が見ゆる。條支は安息に役屬したる外國であつて、未だ安息ではない。されば漢書には安息の條に於て、

安息。西與條支接。

と書して安息の外におき、條支の記述は烏弋山離國と並べ書し然る後に安息の傳を立ててゐる。後漢書に於ても大秦安息と並べて條支國の傳があれば、班固范曄の意、條支は安息に屬したる外國に過ぎず、その版圖内に入る可からざるものであらう。果して然らば條支は安息が實際に支配せる領土内に強ひて之を求むる必要なく、安息に接したる外國の間に求めて後、之と安息との間に幾許の罽縻役屬の關係がありしかを尋ねればよい。安息西界の名は魏略先に唱へて、後漢書後に和したるもの、史記漢書の未だ知らざりし所で、斯る名目には拘泥せぬを可とする。

既に西海即ち地中海に面し、安息より大秦に赴く交通線上にあり、安息西方に横はる外國とはシリアの外にない。條支のシリアたるは之で明白と思ふが、猶役屬の記事に就て數言を費さねばならぬ。

史を按ずるにアレキサンデル大王の没後、その東方の領土は概ね部將セリウコスのシリア王國に合併された。アレキサンデル大王の理想は希臘・波斯兩文明、兩人種の融合にあつたが、後繼者の時代となりては波斯人が除外されて希臘人單獨の政治となつた。此に於て舊波斯治下の人心服せず相率ゐて蜂起し、舊波斯人と同族なるバルチャ王國の建設となり、次第にシリア王國の領土を蠶食し、シリア王國は漸次西に退いて地中海岸の領土を剩すのみとなり、東はバ

ルチャとユウフラテス河を以て境してゐた。西紀前一九〇頃シリア王國は更に羅馬と戦ひ敗れて小亞細亞領を失ひ、南方にはバレスチナの猶太人屢々叛亂を起し、名詮自性の、シリア本部のみしか有せざるシリア王國となつた。バルチャにては時に英王ミトリダテス一世(凡紀元前一二七—一三六年)あり、大征服を行ひ國方その絶頂に達した。彼はシリア王デメトリウスの侵入せるを邀撃して之を虜り自領内に幽囚した。彼の死後フラアテス二世嗣ぎ、シリア王アンチオコスの侵入を破り、その軍三十萬を覆へし、その王を殺した。此より先、フラアテスはシリア前王デメトリウスに自が妹を與へて妃とし優遇したが、此に至り前王を放還し、猶その娘を自ら娶つて此處にバルチャ・シリア間には二重の姻戚關係が出来上つた(西紀前二一九年頃)。フラアテス王の後ミトリダテス二世立つ(西紀前一二—二四年頃)。多くの民族を征服したといふがどの方面か明かでない。シリア王國にては國勢益々衰へ加ふるに内亂あり、瀕死の状態にあつたが、應て羅馬に併合された(西紀前六五年)。(註二)

由來バルチャの歴史は資料に乏しく、西洋の史家が古典作家の中より零細なる材料を集め、貨幣などの遺物によりて辛うじて王統、在位年代等を考證する有様である。張騫が西域に使用して大夏に至りたるは、恰もバルチャが再度シリア軍を撃破して、之と姻戚關係に入りたると殆ど同時である(西紀前一二—二九年)。安息が條支を役屬したりとは斯る事實を傳へたものに違ひない。當時兩國の關係を見るに、シリアは國勢日に非、その依て立つ所は僅かに通商貿易の利入に過ぎず、東方の物資がバルチャ領を經由して來れば之と親善關係に立ち、之が保護を受けるは最も必要のことであり、バルチャより云へばシリアが西方へ通ずる孔道を扼する以上、之を征服するに非んば親善なるが有利であり、之を羸

摩役屬するはその最も希ふ所、寧ろ吾人は史記漢書の記述こそ、西史の闕を補ふものと信ずる。

四 條支はセリウキアなり

條支がシリア王國なるは以上で明かとなつたと思ふが、進んでその名稱の由來を考察しよう。不幸にして私は言語學の智識乏しく、又かの音韻轉化の法則なるものを知らぬが、併し多少の理窟を持たぬでもない。條支の音は現今は *Tiao* と書寫さるゝが、我國に傳はりたる音はデウである。ダ行は時にラ行に轉ずる。小兒がラ行を發音し得ずして之をダ行に云ふは、吾人が屬々耳にする所、然らば條はレウの音を寫し得る。白鳥博士によれば支には又キの音あり、畢竟條支が寫さんと努めたるはレウキであり得る。即ちシリア王國の別名セリウコス王朝、或はその都城セリウキアの音譯に外ならぬであらう。バルチャヤ王國をその國王の號に因んで安息と寫した漢人は、シリア王國を寫すにセリウコスを用ゐたことは容易に首肯し得る。

條支が狹義にはシリア地方を指すにしても、それがセリウコス或はセリウキアの音譯であるとすれば、吾人は之によつて猶幾多の疑問を解釋する手懸りを有することとなる。

第一は條支が安息よりも強しといふ一説に就てである。

魏略。前世又謬以爲。（條支）彊於安息。今更役屬之。

これは安息獨立の初に當つては、安息が裏海附近の山地に立籠りたるに對し、セリウコス王家はシリア・メソポタ

ミアの沃地を有し、嘗てはバルチャ討伐軍がその都を陥れて其王を虜虜させたものであつた。疆弩の末勢とは云ひ乍ら猶安息より強かつた時代があつたのである。このところは白鳥博士も既に云うて居られる(大秦傳より見たる西域地理、四)。

第二に役屬の説明に就てある。前に私は安息が條支を役屬關係におきしならんと想像し、又斯く信ずるものであるが、私の不敏にして西史に通ぜざる、或は之に對して反對論ありても納得せしむる自信がない。然る場合は彼の、

後漢書。(安息)爲置大將。監領(條支)諸小城焉。

の記事は、嘗てセリウコス王家の領土たりし地方を、安息が征服して後之を支配したる状態を傳へたるものと解せんとする。特にバビロンの附近に、セリウコス王家東方の都城たるセリウキア市がある。安息が征服後も大體領内の希臘人都市には自治を許して居たやうであるから、この都市に對する監領の事實を、セリウキア王國殘餘の部分と混同したであらうとも考へられる。

第三は條支國の氣候産物に關してである。乃ち、

史記。臨西海。暑濕耕田田稻。有大鳥。卵如甕。(漢書同)

後漢書。土地暑溼。出師子・犀牛・封牛・孔雀・大雀。大雀其卵如甕。

などある。シリアも暑濕でないこともないが、耕田田稻はメソポタミア平原の灌溉せられたる沃野の形容らしく、大鳥大雀は安息の産物に擧げられる大馬雀と同じく、駝鳥のこと、すれば阿弗利加アラビアの熱帶地に相應はしく、師子は西亞細亞一帶に棲息するが、犀は南方熱帶地の動物、孔雀に至りては寧ろ印度的なるもの、封牛は印度臘賓國産

物の一にも數へられ恐らく Gnou などと同種の野牛らしい。通觀してその産物に特に取り立てて、シリア名物と云ふに足るものが無いが、之もセリウコス王國が嘗て印度國境より埃及に達する迄の大版圖を有するを思へば、其當時の産物として擧げたと認めてよい。

第四に後漢書に見えたる條支國城の記述に就てである。曰く、

條支國城在山上。周回四十餘里。臨西海。海水曲環其南及東北。三面路絕。唯西北隅。通陸道。

斯る條件を具備したる箇所を求めて、白鳥博士はシャブヌの條支 = Mesene 説に左祖し、條支城をその都 Charax に比定されたが、果して博士の注文せらるゝ如き城が此地に存在したか否か疑問である。博士が引用せられたる古文獻は反つて之を裏切るものではあるまいか。曰く、

この城 (Charax 城) は人工を以て盛り上げた丘の上に立ち云云 (フリニイ博物志)

人工を以て盛り上げた丘を山と云ひ得るや否や。若し一步譲りて山と云ひ得るとしても、この城を特に取り立てて山上にありと云ふに値するや否や。況やその城が周圍四十里の大城であるから、デルタの上に人工で築いたものではその高さの程も知れたものであらう。

若し私の説の如く條支がセリウキアの音譯ならば、條支國城とは地中海に臨みたるセリウキア港市に相違ない。セリウキア市はセリウコス王國の首都ではないが、名の類似よりして後漢書の著者が國都の如く書いて了つたのも無理からぬことである。此の町は首都アンチオキアの外港として、オロンテス河口近く、文字通り絶壁の山上に建設せら

れた名城である。當時は勿論長く後世迄有名な所で、今は廢墟に近いが猶此地を訪れる旅人もあると見えてベデカーの案内書にも地圖を附して詳細な記述がある (Baedeker's Palestine and Syria. 1912. p. 363)。町の東と西には、地中海に注ぐ小流の鑿つた深い溪谷があり、西南は地中海を俯瞰してゐる。海水が東南北を環つては居らぬが、三面路絶つとは云ひ得る。山上の城壁は私が圖上で測つた所では大凡十籽あり、古はもつと東南の平地の方へ伸びてゐたかも知れぬ。前述の二溪谷と海とで東南西を限られ、只東北隅に一條の小徑が通じてゐる。後漢書の記載と多少の喰ひ違ひがあるのは、元より傳聞又は傳寫の誤差なる可く、併し乍ら一方にはよくその特長とする所を捕へ來つて實際を彷彿せしめてゐる。

以上の四個條によつて、條支は元來セリウコス王國を指し、時にセリウキア市を指すが、狹義にはセリウコス王朝の根據地たるシリア本部を意味するものなるを説明し得たと思ふが、更に私に課せられた任務として安息より條支に至る迄に存在する阿蠻・斯賓二國の問題が残つてゐる。

後漢書。自安息西行三千四百里。至阿蠻國。從阿蠻西行三千六百里。至斯賓國。從斯賓國。南行渡河。又西南至于羅國九百六十里。安息西界極矣。

右の中里數計算の起點たる安息都城は、漢書の番兜城、後漢書の和積城である。普通に之は Hecatompylos のこととされ、或は Parthava の音譯ならんかといふ。ヘカトンプイルスは安息國の都城であつたには違ひなきも後には閑却されて、國王はエクバタナ、或はクテシフォンに居住したれば、この地名比定には疑あるも暫く云はぬ。蓋し上掲の記事の里數はあまり正確でなきやうなる上、ヘカトンプイルスの位置其物も確定して居らぬからである。

何れにもせよ、裏海南方の一地點より西三千四百里の阿蠻はアルメニアであり、次西三千六百里の斯賓はユウフラテス河上流東岸の Sophene 州であらう。此州は普通アルメニアの一部をなすが、時には獨立王國となつた時もあるやうである。（註）斯賓の極近くに斯羅といふ地がある。

後漢書。從斯賓南行度河。又西南至于羅國。

魏略。從於羅東北。又渡河斯羅。東北又渡河（五字恐衍）。斯羅國屬安息。與大秦接也。

即ち同一の行程を反對の方面より書きたる迄にて、于羅は固より於羅と同一地なる可く、中間に河即ちユウフラテス河を挟む所まで一致すれば、その先なる斯羅と斯賓は同一個所ならざれば最も近接したる二地である。斯羅はアルメニアの西南に接し、ユウフラテス河の彎曲によつて南西北を圍まれたる Osrhoene 州なる可く、その東北には直ちに Sophene 州が接してゐる。因みに Osrhoene 州はバルチャ領の西端で安息王に隸屬したる封建的君主が支配して居り、ユウフラテス河を隔てて、先には久しくシリアと界を接し、後には羅馬と相隣つてゐたものである。魏略に、斯羅國屬安息。與大秦接也。の一句最もよくその位置を説明してゐる。斯羅よりユウフラテス河を越えたる西南にある于羅、又は於羅はアレツボ（又はアラツブ）であらう。アレツボはシリアに於て最も古き都市の一であるが、セリウコス王國時代はすぐその西にアンチオキア市が建設されて都城となつた爲、一時その重要さを減じたが、猶其地方一帯は舊名を以て呼ばれたに相違なく、土耳其帝國時代より再び要地となり、現今に及んで依然アレツボは北シリアの中心となつてゐる。而してこの于羅は既に安息の西界であり、云ひ換れば安息よりは外國であり、安息に對して役屬の

關係にあつたかも知れぬが、聽て羅馬の東方經略と共にシリア王國は滅亡し、魏略の記事に於ては子羅が大秦小王國六の一に數へられてゐるのである。猶條支より安息に至る逆の道程を後漢書に記して、

轉北而東。復馬行六十餘日。至安息

とある。

五 大秦の地理風習

條支をシリアに比定することの有利なるは、更にその大秦との關係に於てである。寧ろ私にとつてはこの方が重要な着眼なのである。もしも條支が安息の領内西方の隅に踞蹠して居つて、そこで行詰りならばそれが何處にあらうと大した問題にならぬ。條支は實に支那中央亞細亞より大秦に赴く交通の大幹線を扼し居るが故にこそ、それが私の興味を惹いたのである。

大秦が何の意味を有し、何の語音を寫せるにもせよ、それが羅馬帝國であることは史乘に昭々として疑ふ餘地がない。後漢の桓帝延熹九年(西紀一六六年)大秦王安敦が派遣したる使節、日南徼外より來り洛陽に達した。その安敦が Marcus Aurelius Antonius である以上、大秦王は羅馬皇帝、大秦は即ち羅馬に外ならぬこと火を暗るよりも明かである。然るを前人動もすれば、殊更に羅馬帝國を狹義に解し、その中心を或はシリアに、或は埃及に求めんとするは領解に苦しむ。大秦をして伊太利半島の羅馬たらしむるに如何なる困難が存在するであらうか。

後漢書。大秦國一名犁鞞。以在海西。亦云海西國。

魏略。大秦國一號犁鞞。在安息條支西。大海之西。

即ち根本史料に於て、海西にありと云ひ、大海の西にありと云ひ、よく地中海の東岸より見たる羅馬の位置を説明して餘蘊がない。思ふにヒルト以來説をなす者、皆條支を誤て東方に置きたる爲、勢ひの赴く所、大秦を之に準じて東方に移動させざるを得ぬ破目に陥りたるもの、而して多大の無理が之に伴つて生じて來たのである。

事實は條支即ちシリアより、大秦羅馬に赴く交通路は、後漢書、魏略に幾度か反覆して明快に記述されあり、歴々指摘す可きものがあつて、毫も疑惑を挟む餘地なきものである。

第一は海路である。但しシリアより羅馬に赴くには水路直通であるから何の奇もない。

後漢書。于羅。安息西界極矣。自此南乘海。乃通大秦。

魏略。從安息界安谷城。乘船直截海西。遇風利二月到（大秦）。風遲或一歲。無風或三歲（史記大宛傳注引魏略。遇風利時。三月到。風遲或一二歲）

乃ち安息西界、條支より直接海路大秦に到るもので、安息界安欲城は詳しくは安息西界安谷城を略したるか、或は大秦領の安息國境に近き安欲城とも解し得られる。何れにもせよ、こは條支即ちシリアたるは疑なく、後漢書の于羅は、魏略の安欲城と等價値と認められる。于羅即ちアレツポ地方の安欲城とは取も直さず、シリアの首都アンチオキア市に外ならぬであらう。因みに魏略のこの記事は後漢書に見えたる甘英遣使の記述と關係がある。曰く、

和帝永元九年（西紀九七年）。都護班超遣甘英。使大秦。抵條支。臨大海欲度。而安息西界船人謂英曰。海水廣大。往來

者逢善風。三月乃得度。若還遲風。亦有二歲者。故入海人。皆齎三歲糧。海中善使思土戀慕。數有死亡者。英聞之乃止。

これは面白き一挿話であるが、或は之を以て安息人が支那と大秦との直接交通を好まず、故意に船人をして誇大の言をなさしめ、以て甘英を恐怖させ、大秦に赴く計畫を抛棄せしめたものと推量する人がある。併し乍らこの文を讀むに、安息船人が安息政府の間牒であるとは受け取れない。船人の言を魏略の文と比較するに、

後漢書船人ノ言。善風ナレバ三月。遲風ナレバ二歲。

魏略。風利ナレバ二月(史記注。三月)。風遲ケレバ一歲(史記注。二歲)。風無ケレバ三歲。

即ち魏略に普通要する日數として掲けたるものに比して殆ど差異を見ない。云ひ換れば航海日數はそこにたとひ誇張があるにもせよ、そは普通一般に行はれたる誇張の言であつて、安息西界の船人が特に惡意を以てなしたる誇張の言ではない。船人の言には更に懷郷病か、壞血病かに就ての數語があるが、之も當に有り得可きことであつて、別に威嚇の意味は含んでゐない。もしあつたとしてもそは正にヒルトも想像せる如く船人が旅客に酒錢を強請する常套手段であつて、直ちに安息資本家の内意を受けたものとも解されぬ。而して甘英は故郷を去ること萬里の異國にあつて、今更の懷郷病でもあるまい。甘英が大秦に使用する使命を果さず途中より引返したる眞の理由、動機などは全く個人的のもので、その甘英がいかなる人物でありしかも分らねば、考證しやうにも方法がない。要するに以上は單なる一挿話に過ぎぬものである。安息西界の船人は即ちシリアの船人であつて、旅客たる甘英に常套話を告げた。話はそれ丈

に止まる。強ひて之を想像曲解して、安息政府の廻し者となれる波斯灣の船人とする必要は毫もない。而も翻つて思ふに、かの領學ヒルト以來、何人の學者が、甘英と共にこの「波斯灣の船人」に誑かされたことであらうか。

第二の條支より大秦羅馬に至るには猶別に陸道がある。之は魏略に、
前世但論有水道。不知有陸道。

と云へるもの、扨その經路は、

魏略。從安谷城。陸道直北行。之海北。復直西行。之海西。

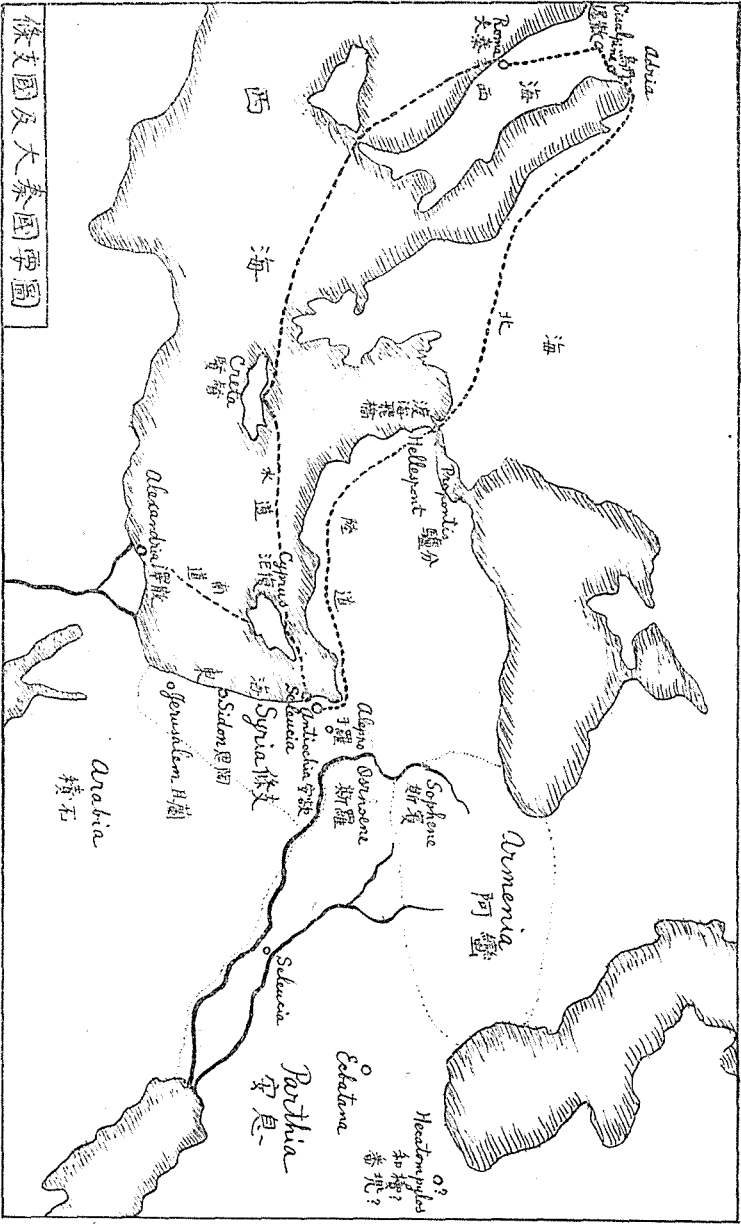
後漢書。從安息陸道。繞海北行。出海西至大秦。

とあり、兩者共に安欲城即ちアンチオキアより北して地中海の北岸に沿ひ、大秦羅馬に至る道を記したものである。海西は即ち羅馬であるが、廣義には伊太利半島を指すものであり、海北は希臘、巴爾幹半島、或は小亞細亞をも含むならんと推測される。さればこの經路はアンチオキアより小亞細亞の海岸に沿ひて進み、ヘレスポント海峽を渡り、バルカン半島を西に横斷し、アドリア海を繞つて、所謂ガリア・チサルピナ州より海西即ち伊太利半島に達するのであるが、この際ヘレスポント海峽を渡る時の方が更に詳しく記録のあるのが面白い。

魏略。從驢分城。西之大秦。渡海飛橋。長二百三十里。

後漢書。有飛橋數百里。可渡海北諸國。

驢分はプロポンチス海か、或はヘレスポント海峽の音譯であらう。兎に角海北諸國即ち巴爾幹希臘に渡る海橋とはへ



條支國及大秦國地圖

條支と大秦と西海 (宮崎)

第二十四卷 第一號

七三

レスポントの夫に違ひないのである。この橋は波斯のクセルクセス王が希臘征伐の際に巨費を投じて架したもので歴史上に有名な事實であるから、（註四）恐らく漢代には既に存在しなくても長く東方人の智識に残つて、漢使の耳にも入つたものと見える。前説之を以て多くユウフラテス河に架する所とするの非なるは言を待たぬ。長さ二百三十里は如何に見ても多きにすぎ。或は二三十里可りとある可きを寫し誤り、後漢書亦之を承けたるものか。

白鳥博士の説では條支をカルデア南方とし、大秦を埃及アレキサンドリアとする結果、陸道條支より大秦に至るに海を繞つて行くことが出来ぬ。そこには海西もなく、海北諸國もなく、況や渡海の飛橋もない。そこで、

漢代の支那人は Arabia 半島を海洋と誤解し、犂軒國はこの海の西にあるといふので、之を海西國とよんだのである。（大秦傳に現はれる。たる支那思想）

と云はれたが、非常な無理が入ることを否めない。

猶魏略に大秦に屬する地名數個を擧げてゐる。魏略のこの所は、何分にも他書の注に引かれたこととて、記事に混雜があり、明かに衍文誤謬と認めらるゝものも存在するから、本文の一字一句を墨守するわけには行きかねるが、相互の方角と音似の上より、出来る丈の近似値を求めて見るのも徒爾ではあるまい。位置比定の方針はなる可く有名なものを探ぶ。蓋し此等の地名は殆ど悉く傳聞に出で、若し西域舊圖と云ふが如き一種の地圖を見たりとするも、その智識の精確の度に限度あり、且は吾人の有する記録のテキストの正確さに又限度あり、里數方角に於て若干の誤差は豫め覺悟せねばならぬ。但し萬里遠方の地名にして漢使の耳に入るものは必ずや相當に有名にして、人口に膾炙し

るたる地に相違ない。地圖の上に顕微鏡を用ゐて檢し得るが如き地名を強ひて求めて記録の上に符合を計り、或は千年後の亞刺比亞語、波斯語の單語を借り來つて強ひて音韻上の辻褄を合せんとする如き試みは私の爲し能はざる所であると共に私の採らざる所である。寧ろ私の尊ぶ所は何人も感ずるであらう所の直感である。

(1) 于羅。アレツボ。既に上述。

(2) 思陶。シドン又はシツダ。この音最も近い。

(3) 且蘭。イニルサレム。且蘭はサレムの音譯。

魏略。從思陶國。直南渡河。乃直西行。之且蘭。三千(百?)里。

こゝに云ふ河とはヨルダン河か。古代の希臘人の地圖を見るに、シリア・フェニキアの海岸線が南北に走らずに斜東北より西南に伸びたものがある。それでシドンよりエルサレムへ行くにも南行とする代りに、西南行すると見えたり、或は西は南の誤か。三千里は明かに三百里の誤。

魏略。且蘭汜復(二字)直南。乃有積石。積石南乃有大海。出珊瑚眞珠。

積石はアラビア沙漠。大海は紅海印度洋であらう。

(4) 汜復。キプロス島。

魏略。汜復王屬大秦。其地東北去於羅三百四十里。渡海也。

又曰。於羅屬大秦。其地在汜復東北。渡河(海ノ誤カ)。

於羅即ちアレツボの西南海上はキプロス島に外ならぬ。

又曰。從且蘭復直西行。之汜復六百里。南道會汜復。

キプロス島はイエルサレムより西北に當るが、恐らく此頃の地圖に實際よりも南へ下つて描かれてゐたのがあつたのであらう。さればアレツボより見て殆ど直西なる筈のキプロス島が、西南となつてゐる。南道云云は意味不明であるが、或はアレキサンドリアよりの南方航路が此處で會合する意味か。

(5) 賢督。クレテ島。

魏略。汜復。乃西南之賢督國。

又曰。賢督王屬大秦。其地東北去汜復六百里。

この所恐らく渡海也などの字が落ちたものであらう。その方角もキプロス島の略直西に當るが、この島が更に南方に偏して地中海の中央に描かれてゐたのであらう。キプロス・クレテ兩島間の距離は、イエルサレム・キプロス間の距離よりも實際は遙に大であるが、この位の誤差は致し方がない。

(6) 澤散。アレキサンドリア。

魏略。其治在海中央。

之はナイル河デルタ上にあり、海中に突出するを云ふ。

又曰。北至驢分。水行半歲。風疾時一月至。最與安息安欲城相近。

アレキサンドリアよりヘレスポント海峡迄、一月乃至半月の航程とある。之を先にシリアより羅馬までの二三月乃至二二歳と考へ合せて、一般に航海の日數が事實より誇張して傳へられたる風ありしを知る。愈々以て先の安息西界船人の言が別に他意なかりしを證するに足る。安息安欲城は中間に西界の二字を脱したのであらう。この時代は既に大秦が條支を併せ于羅地方となつてゐる時であるが斯る時代錯誤は支那史籍に有り勝ちのことなれば深く咎むるにも及ばず。アレキサンドリアがアンチオキアと最も相近しといふは不適切なるが、アレキサンドリア・シリア間に直通の航路があるを云へるか。或はアレキサンドリア以外埃及の諸都市を列舉しありしを三國志注が削除せし結果か。或はシリアのアレキサンドレタを混同せしか。

又曰。西南詣大秦都。不知里數。

西南は正に西北の誤。或は羅馬に赴くに埃及の海岸に沿つて進めば羅馬もその海岸線の方向にありと誤認したる結果か。

(7) 遅散及び烏丹。遅散はボロニア若くはラヴェンナ。烏丹はアドリア。之に就ては少しく考證を要する。魏略の陸道安欲より大秦に至る記事の中、海西即ち伊太利半島に達して後、羅馬に至る迄の道程を記した甚だ難解なる左の一節がある。

海西。復直南行。經烏丹・遲散城。渡一河。乘船一日乃過。周廻繞海。凡當渡大海。六日乃到其國(大秦)。

右の中「經烏丹遲散城」の六字、普通に「經之烏遲散城」に作る。前人之を以て「經て烏遲散城に之く」と讀むが、

斯くては經の字意義をなさぬ。この所明かに誤字がある。魏略の地名、他は悉く二字を以て翻譯するに、此所丈三字なる筈がない。幸ひに元郝經續後漢書卷八十注に引く所、「經烏丹遲散城」に作るので之に従ふことが出来る。伊太利半島の北端より羅馬に向つて南下するこの道程が、別の個所にある

從（大秦）國下。直北至烏丹城。

の句にも合致する。この烏丹城は恐らく *Adria* 又は *Hadria* でポー河の北にあり、現今は果して存在するか否かも知らぬが、古は有名であり、それがアドリア海の名となつて今に残つてゐる。遲散はガリア・キサルピナ州の音譯、州城はポロニアの筈であるが、この場合は或はラヴェンナかも知れない。次に分らぬのはこの附近で一日船にのつて渡る大河があるが、それが次の如く三個所に載つてゐるのは、どれか一つが原文で他は誤つて重複したるものに違ひない。

烏丹城。西南又渡一河。⁽¹⁾ 乗船一日乃過。西南又渡一河。⁽²⁾ 一日乃過。

經烏丹遲散城。渡一河。⁽³⁾ 乗船一日乃過。

右の中(3)は上文が既に誤つてゐたのであるから、それに續いたこの文も疑はしいので第一に抹殺さるゝ資格がある。

(1)(2)は全く同じ文を並べたので、漢文になき表現法であるから、(2)は誤れる重複として抹殺して差支へなからう。果して然らば(1)に残りたるこの大河は烏丹城、即ちアドリア市の南なるポー河に違ひない。正しく云へば烏丹城より此河を渡りたる所に遲散城があるので、遲散城の次にこの河を渡るのではないのである。その後の文句、

周廻繞海。凡當渡大海。

の意味曖昧なるが、以上の陸道はアドリア海を繞る迂廻路なれば、その日數、大海を横斷するに相當するの意か。或は凡の字、否の誤にて、「否らざれば當に大海を渡る可し」とでも讀む可きものか。次に、

六日乃到其國。

は遅散城より羅馬に到る日數である。

以上私は八箇の大秦の地名をさしたる無理なく解釋し得たと信ずる者であるが、總じて古代の地名を漢字に音譯する際、その漢字の發音は、現代支那音よりも寧ろ、古く吾國に傳はりたる漢音と相近いといふ結論に到達したのである。

更に魏略には二條の山脈に關する記載がある。曰く、

且蘭（四字）復（衍）斯賓阿蠻北。有一山東西行。

これカウカサス山脈とタウルス山脈とを連續せしめて考へたものであらう。

又曰。大秦海東。東各有一山。皆南北行。

海東とは于羅思陶且蘭の諸國。山は有名なるレバノン山脈、奥レバノン山脈及びその續きであらう。

更に魏略には漢人が極西の地大秦に就て有したる若干の智識を載せてゐる。曰く、

其國無常主。國中有災異。輒更立賢人。以爲主。而生放其故王。而王亦不敢怨。

之は羅馬のコンスル、デクタトルの選舉制度を傳へ聞きて表はすに支那式表現を以てしたるもの。又曰く、

王出行。常使從人。持一韋囊自隨。有白言者。受其辭投囊中。還宮乃省爲決理。

こは護民官が四六時中門を開きて、被迫害者が自ら來り投ずるを待ちし等の制度を支那色に潤色せるもの。又、置三十六將。每議事。一將不至則不議也。

三十六人は少しく内輪すぎるが、羅馬の議會制度。又、

十里一亭。三十里一置。終無盜賊。

は羅馬帝國內の驛遞制度。

其王治濱側河海。以石爲城郭。

其王所治城。周回百餘里。有官曹文書。王有五宮。一宮間相去十里。

は羅馬城の雄壯宏大なるを云ふ。五宮は羅馬七丘の故事を五行思想を以て修飾せる結果。

其俗能胡書。

ラテン作家の名聲漢使の耳に入る。

有河出其國西。

長さも幅も取り立て、云ふに足らぬが、史上に有名なるチベル河はこれ。

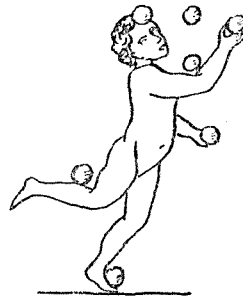
大秦西有海水。海水西有河水。河水西。南北行有大山。西有赤水。赤水西有白玉山。白玉山有西王母。

大秦の西の海水は西部地中海。その西の河水は佛蘭西のローム河。その西の大山は佛蘭西中央山塊。次に西の赤水は史上に名高きエプロ河、之を赤水と云ふはこの河の水の赤色なりしに因んか。次の白玉山は西班牙の銀の鑛山を指

せるものであらう。そこに西王母があり、原文なほ續くが、この邊よりお伽噺の領域に入り、眞面目に考證が續けられない。

俗多奇幻。口中出火。自縛自解。跳十二丸。巧妙(非常)。

非常の二字、當に後漢書の注に引く所によつて補ふ可きである。十二丸を弄する藝人の佛は、古羅馬の折繪(dip-



Pilarius の圖

stus)の中に覗ふことが出来る。圖は七丸しか飛ばして居らぬが、原理は同様にて、前額・手・腕・足の甲・ふくら脚にて丸を受けて跳ねかへして地に落さしめずに操つてゐる所である。拉典語にて Pilarius と云ふ。(註七)

作金銀錢。金錢一當銀錢十。

年月比例制度とも云ふ可き金銀比價の法則は羅馬のみならず西亞細亞一帯に行はれ、金の價を一年の日數三百六十とすれば銀の價は一月の日數二十七、結局十三對一なる金銀比價が凡そ二十世紀間も行はれてゐたのである。但し現實の貨幣は純金でなく約二十%の混合物があるので、その比價は殆ど十對一となる。(註六)

其外魏略には大秦の物産をも列舉してゐるが此處には一々舉げない。總じてその言ふ所、誤解もあり誇張もあるが、當時としては割合によく實相の把握に力めたりと云ふ可く、決して支那自身の幻影を遠西の地に蜃氣樓の如く望見したものでないことが知れる。

六 結 語

以上私は支那史籍に見ゆる西海は地中海であり、條支はシリアであり、大秦は羅馬本國に外ならぬことを論證し得たと信ずる。近頃偶々那珂博士の東洋小史及支那通史を繕きたるに、條支を叙利亞とし、大海を地中海とされしを見て、益々意を強うした。顧みるにヒルトが「支那と大秦」に於て條支をカルデアに、西海を波斯灣に比定して以來、東西の學者概ね其説を奉じ、藤田博士も之を少しく東方に移したるのみで、結局ヒルトの舊套を脱して居らぬ。その結果、條支に接する大秦は或はシリア、或は埃及に求めざるを得なくなり、當時の東西兩洋を連結する交通の大幹線が空しく埃及の砂漠中に埋没したるのみならず、一錯誤は一錯誤を産み、アラビア砂漠を海とし、大秦國を無可有郷とせざるを得ぬに至つたのである。而も白鳥博士は、史記漢書にシリアの記載なしと疑ひ、

武帝の時代に安息國の西に接して Syria 王國があつた。（略）建國以來已に百八十餘年も經過して來た國であつて、而も文化の點に於ては尙當時の西域に優越の地位を占めてゐたのであるから、此の國の名が張騫の耳朶に觸れないでゐたとは思はれない。（大秦傳より見たる西域の地理）

と云つて居られ、更に別の個所では條支はアンチオキアの音譯とし、

條支國はシリア王國を指したものだとすれば云々。（大秦傳より見たる西域の地理、四）

とさへ云つて居られるではないか。これこそ將に私が云はんと欲する所であつて、私の説は無下に博士の所論に反對

するものでなく、反つて博士の理論をある可きやうに發展せしめたる結果なることは、博士も承認さるゝであらうと信ずる。思ふに時は西曆紀元前後、極西の地羅馬より大道長安に通じ、之を東に延せば眞儘我國にも至る事實に想到すれば、痛快の念禁じ能はざるものがある。

註(一) 参照邦文論文

白鳥博士 大秦國及び拂菻國に就て(史學雜誌第十五編四・五・八・十・十一號)

條支國考(内藤博士還曆祝賀支那學論叢)

大秦傳に現れたる支那思想(桑原博士還曆記念東洋史論叢)

大秦傳より見たる西域の地理(史學雜誌第四十二編四・五・六・八號)

藤田博士 條支國考(東洋學報第十三卷二號)

(一) Rawlinson: The Sixth Oriental Monarchy. 1873. 本論内に於けるバルチヤ史實に關しては、殆ど全部をこの書に負ふことを自白する。

(三) Rawlinson の同書百四十頁に、King of Sophene, or Armenia Minor と云ふ句が見ゆる。

(四) クセルクセス王のヘレスポント架橋のことはヘロドトスの史に見ゆ。曰く、

アビドスの對岸、ヘレスポントのケルソネスは巖壁なり。アビドスより此巖壁に向ひ、フエニキア人は白麻索を、埃及人はパピルス索を張りて架橋せんとす。其距離七スタディア。然るに一日颯風起り、張索架板を粉塵して工事水泡に歸す。クセルクセス王聞きて嚇怒し、命じてヘレスポントの海面を鞭つ三百打、兩條の鐵鎖を沈め、予が聞く所にては別に烙器を沈めて、「汝不庭の江水、君王爾に背く莫きに、爾敢て君王に背くを以て此罰に處す。爾の諾否に關せず、クセルクセス王は爾を渡らむ。好譎の鹹江、また犠牲を供せず」と痛罵せしめ、架橋を督せる者を斬り、人を代へて工を起さしむ。新工は案を更め、ユキシン海より三百六十、ポントスよりは斜にヘレスポントの潮勢に順ひて張索の緊力に耐ふるやうに三百十

條支と大秦と西海 (宮崎)

第二十四卷 第一號

八三

四の、五十楯三層船を連結して相連らしめ、内より吹く風を防ぐにはボントス方面の橋に、南風に耐ふる爲には西方よりの橋梁に、各長鎗若干を投ぜしめ、來往出入の輕軻の爲に、五十楯船間に水路を開くもの三處、張索を絞車に捲きて水面に張るに、前には兩種の索綱を各別に用ひしも、今は白麻索二條バビルス索四條を合せ張る。蓋し兩種の索綱量均しく、毎キユピットの重さ一タレントなるも、強度は麻索の優れたればなり。索張りて後木板を列して之を縛束し、上に倭樹を並べ土砂を盛り、馬匹の水に驚かざらん爲兩側欄柵を設く。（坂本健一氏譯世界最古史による）

なほダリウス大王もスキタイ征伐に當り、黒海に近きボスフォラス海峡に架橋してゐる。

(五) Rich: Dictionary of Roman and Greek Antiquities 1901. 圖は同書に載せたる Verona 博物館の折繪に據る。

(六) White: Silver, its History and Romance. 1917 p. 197, p. 211, p. 309.

【附表一】

地名比定諸説一覽表

原 名	エ ル ト 説	白 鳥 博 士 説	著 者 説
條 支 蠻 賚 羅 于 斯 阿 條	Chaldea Achatana Ctesiphon Hira Seleucia	Mésène-Kharacène, Kharax, Antiochia, Ecbatana Ktesiphon Ura, Vologesia Seleucia	Syria, Seleucia Armenia Soplene Aleppo Osrihoene Roma
大 秦 羅 秦 海 欲 復 蘭 陶	波 斯 灣 Orchoë Emesa Palmyra Sittake	波 斯 灣 Orkoi Dannask Palmyra Sittake	地 中 海 Antiochia Cyprus Jerusalem Sidon
西 安 汜 且 思			

(附記) 本文稿成り刷に付して後、小川博士著、支那歴史地理研究所收、歴史地理の地名學的研究、條支國、大秦國條下に於て、條支を(アンチオキアの音譯として)シリアに、驢分をプロボンチスに、安欲をアンチオキアの異譯として比定されあるを讀みて、今更乍ら自分の迂濶なりしことを知り、慚愧に堪えぬ。併し其他の點に於て、猶博士の高説と異なる所もあれば本文存在の理由も成立つならんと思ひ、字句を變更する所なく、その儘掲載せしむることとした。博士の諒恕を請ふ次第である。